

Title	『山門秘伝』と『山門建立秘決』
Sub Title	A study of "Sanmon-konryū-hiketsu" : expansion from the contents of "Sanmon-hiden" showing the history of Mt. Hiei-zan Enryaku-ji temple
Author	高橋, 悠介(Takahashi, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2018
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidō Bunko Institute). No.53 (2018.) ,p.167- 197
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190228-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『山門秘伝』と『山門建立秘決』

高橋 悠介

一、はじめに

慶安四年（一六五二）八月に刊行された比叡山の寺誌に、『山門建立秘決』『山門秘傳見聞』という版本がある。内容はいずれも、比叡山の諸堂塔の由緒や寺域の意義を説くもので、両者合わせて一冊の形で刊行されている。国文学研究においては、古くは御橋惠言（一八七六―一九五〇）が『平家物語』や『神皇正統記』の山門関係記事の注釈に活用しており、また史学研究においても、慈覚大師円仁の立石寺（山形市・山寺）入定説などに関連して、しばしば引用されてきた。

本書の成立については、勝野隆信が「慈覚大師入定説考」で「南北朝時代のはじめ」と推測している。それは、永徳三年（一三八三）に上野国世良田長楽寺の了義が記した「慈覚大師画像賛」に、

「…文徳天皇貞観六年正月十四日帰寂^{七十}、花芳峰^ニ留^メ杳片足^ヲ、其日昇^リ空中^ニ、向^テ東方^ニ、其日下野州日光山供養、其日羽州立石寺入定、隠顕出沒、巨^ク測^リ巨^ク量^リ」

とある記事が、『山門建立秘決』の

「慈覚大師者、於前唐院御入滅畢^ヌ、爰自御館飛出^テ行東方^ニ、御草鞋落華芳^ノ峯^ニ、其日其時^至玉^ヘ出羽國^ニ。」

という記事や、『山門秘傳見聞』の関連記事によってなされた

であろうという考察などに拠っている。両者は同文的一致をみせる訳でもなく、日蓮もすでに弘安三年（一二八〇）の書状で慈覚大師の御頭が立石寺にあると書いているが、南北朝期との見解を踏襲する研究は多い。例えば佐々木馨氏は、円仁の入定説話の舞台である立石寺が、北条時頼の外護により天台寺院から禅寺に転換した後、再び天台宗に復したのを「南北朝期の末か、室町初期の頃であろうか」とした入間田宣夫氏の見解を受け、これを本書の成立時期と関連付けて、

「慈覚大師の立石寺入定を伝える最も整備された史伝として、「山門建立秘訣」「山門秘傳見聞」などが、南北朝期に編纂されたというのも、おそらくその天台宗への復宗と因果するに相違ない。」

とする。しかし、版本の本文中に成立に関わる本奥書が含まれている訳でもなく、確たる根拠もない中で、そのように関連づけて断定するのは問題があろう（両書は基本的に比叡山の堂舎を主題としており、立石寺関連の記事がごく一部に過ぎない点も付言しておく）。

ここで、版本『山門建立秘訣』の成立を考える際に重要な写本として、『山門秘傳』を指摘したい。管見の限り、横浜市・

称名寺蔵本と叡山文庫毘沙門堂蔵本が伝存し、前者は鎌倉後期の写本である。後述する通り、『山門建立秘訣』の前半部の記事は、『山門秘傳』の本文にほぼ対応することから、対応記事がある部分については、成立が鎌倉後期まで遡り得ることになる。神奈川県立金沢文庫で二〇一八年十一月から開催された「顕われた神々―中世の霊場と唱導―」展において、国宝・称名寺聖教『山門秘傳』を展示した際、図録の解説において『山門建立秘訣』との対応を指摘したが、図録という性格上、詳細にふれることはできなかった。

そこで本稿では、これらの書誌を紹介した上で、両者の比較から見えてくる『山門建立秘訣』及び『山門秘傳見聞』の成立過程の問題について述べたい。あわせて、『山門秘傳』の校訂本文と写本間での異同、及び『山門建立秘訣』との異同を示すことにする。

二、『山門建立秘訣』『山門秘傳見聞』の伝本

まず、『山門建立秘訣』『山門秘傳見聞』について、書誌を記す。調査し得た伝本は、いずれも山門建立秘訣・山門秘傳見聞、

各一巻が合わせて一冊となっており、山門秘傳見聞の末尾に慶安四年八月の刊記を持つものと、寛文九年正月の刊記を持つものがある。両者は同版で、字画や匡郭の欠損にも一致する部分がある。そこで、最初に岩瀬文庫本の書誌の中で版式を示し、他の伝本については各々の本に特有の要素のみ述べる。

●慶安四年八月刊本

○西尾市岩瀬文庫蔵本 九九―二四

袋綴、一冊。渋表紙（二七・九×一八・八糎）。外題なし。表紙左上に「五」と朱書。下小口に「山記全」墨書。見返左下に四角の捺消跡があり、左端に「西塔嵯多谷／榮泉院蔵本」と墨書。各巻内題、「山門建立秘決」及び「山門秘傳見聞」。『山門建立秘決』（以下前者）が十三丁、続く『山門秘傳見聞』（以下後者）が二十六丁（以下、いずれの伝本も同様の順序・丁数）。本文、漢文。附、返点・送仮名・連合符（一部）。返点・送仮名は、元から刷られているものに加え、後からの書入れも多い。四周単辺（前者二二・〇×一五・五糎、後者二二・九×一五・五糎）。每半葉十行、每行字数二十一字。

版心、白口双内向黒魚尾。柱題、前者は「山門建立秘決」（第一―六丁）・「山門建立秘決卷二」（第七―十三丁）、後者は「山門秘傳見聞」。前者には尾題なし、後者末尾には「秘傳見聞終」と刷る。刊記「于時慶安四歳／仲秋吉辰／庄右衛門版之」。刊記の右余白に「西塔榮泉院」と墨書し、双郭墨陽方印「天盛」を捺し、後見返にも同筆で「為二親師願證菩提也」（菩提は合字）と記す。

印記、前者の第一丁表に墨陽方印「山門西塔榮泉院蔵本」、朱陽方印「大行滿／願海蔵」（後者の第二丁表と刊記の上にも捺す）、朱陽方印「奉納阿都山／寺流芳萬年／大行滿願海」、朱陽方印「元慶寺印」、朱陽方印「岩瀬文庫」。後者の尾題の前、本文末尾に朱陽方印「寂忍房／圖書章」。

○叡山文庫真如蔵本 真如蔵／内／12／14／1625

渋表紙の表面が剥がれ、淡灰色の下地が残った状態（二八・二×一九・四糎）。外題なし。表紙右上に蔵書票「真如蔵書、部数一六二五、書冊五七六二、昭和廿九年八月十日寄托」。

『山門建立秘決』の巻首に「十四」と朱書、「山門東塔南谷淨教房真如蔵十四九十五陶」と墨書。

○京都大学附属図書館蔵本 蔵/24/サ/20

香色表紙(二五・一×一八・四糎)左上に三層の縹色双郭題簽を貼り「山門建立□□/山門秘傳見聞」と墨書(□は虫損)。

表紙中央下部に朱陽方印「臧經書院」。表紙右上に赤色の蔵書票(□□撰述/第628號)を貼り、その上にさらに蔵書票「臧/24/サ-20」を貼付。下小口に「山門建立」墨書。本文には墨で返点・送仮名・区切点や注記を書入。刊記の丁の匡郭内に墨減跡あり。

『山門建立秘決』巻首に双郭朱陽方印「壽命院蔵」、朱陽方印「青蓮/王府」、朱陽方印「京都/帝國大學圖書之印」。

●慶安四年八月刊 寛文九年一月印本

○京都大学附属図書館蔵本 日臧/未刊/276

洪表紙(二五・八×一八・八糎)左上に「山門建立秘決」と朱書。右上に蔵書票「日臧/未刊/276」。

『山門建立秘決』巻首に朱陽方印「釋氏/祐苒」、朱陽方印「京都/帝國大學圖書之印」。後見返に「祐苒臧」と大字墨書。

○大正大学附属図書館蔵本 139/7/1

洪表紙(二六・三×一八・七糎)左上に素紙題簽を貼り「山門建立秘決」と墨書。表紙右上に「字十三」と朱書、右下に「察常所持」と手沢銘。右上に整理番号を記した蔵書票貼付。本文には墨で返点・送仮名を振り、字画の欠けた部分にも補筆する。刊記「法華宗門書堂/寛文九己酉年/正月吉辰/武村市兵衛昌常/村上勘兵衛元信/村上平左衛門常知/八尾甚四郎知春」。

『山門建立秘決』巻首に朱陽方印「浄土宗圖書館蔵本/禁賣典」、朱陽方印「察常書籍/寮外不出」(『山門秘傳見聞』の第二十五丁裏にも捺す)。『山門秘傳見聞』第十一丁表四〜七行目にのみ朱の批圈点を施す。

○立正大学図書館蔵本 A 16/7/1

洪表紙(二六・五×一九・〇糎)。外題なし。右上に「□/冊」上ノ四」と墨書し(□は蔵書票の下で見えず)、その上から「歳一上/易下ノ三」と朱書(「歳一上」は朱線で見消)。表紙右上に日宗大學の蔵書票「部:B/號:311/冊:1全」貼付、右下に蔵書票「A 16/7/1/RU1」貼付。最初の四丁のみ、朱

で返点・区切点…合点・批点・朱引を施す。

『山門建立秘決』内題下に朱陽方印「大正五年八月二十五日／
貞松蓮永寺寄贈」、朱陽方印「貞忝文庫」(現静岡市葵区沓谷の
日蓮宗寺院・貞松山蓮永寺旧蔵)。

他に慶安四年の刊記を持つ本として、龍谷大学蔵本、明徳院
無動寺蔵本、ハーバード大学燕京図書館蔵本、京都市・瑞光寺
蔵本などが、また寛文九年の刊記を持つ本として、大谷大学蔵
本⁵が知られるが、未見である。

慶安四年の刊記にみえる庄右衛門は、京都・寺町三条上町で
仏書を多く刊行している。『江戸時代初期出版年表』から庄右
衛門の刊記を拾ってみると、仏書の中でも特に天台学関係の版
本を多く刊行していることがうかがえる。『天台三大部会本』
(寛永十五年正月)、『天台円宗四教五時西谷名目』(正保二年七
月)、『天台四教儀備釈』(正保三年七月)、智顛説『金光明経玄
義』(正保四年一月)、智円述『顕性録要文』(正保四年六月)、
湛然述『法華玄義十不二門』(正保四年七月)、最澄撰『守護国
界章』(正保四年十二月)、有敝注『玄籤備檢』(慶安元年六月)、
源信撰『十如是義私記』(慶安二年十二月)などは、庄右衛門

の刊行した天台関係書である。天台関係以外でも、『大乘起信
論疏』(寛永十九年三月)や日蓮の『録内御書』(寛永二十年正
月)などの刊行が知られるが、主には天台関係の書物を扱って
いたようで、『山門建立秘決』『山門秘傳見聞』もそうした庄右
衛門の一連の出版事業の中に位置付けられよう。

一方、寛文九年(一六六九)正月の刊記にみえる、京都四書
肆の合資による「法華宗門書堂」については、冠賢一氏の研究
に詳しく、元禄九年(一六九六)刊『増益書籍目録大全』に版
元「四軒仲間」として収録されている八十六点の版本が、法華
宗門書堂版に相当することが明らかになっている。冠氏の調査
によれば、本目録に未収録の現存版本も含めると、法華宗門書
堂は寛文九年正月に百三点、翌十年正月に二点の日蓮宗学・天
台学書を一挙刊行している。こうした短期間での大量出版の背
景として、氏は江戸前期に各地に創設された日蓮宗檀林におい
て、天台学を重視した修学課程が組まれたことなどを指摘して
いる。そうした中で、本書のような比叡山の堂塔を主題とした
ものも刊行されているのは興味深い。法華宗門書堂は、寛文九
年の前年に藤田了竹(庄左衛門)から百四点の版權を買取して
いるが、この藤田了竹の父が庄右衛門にあたる。冠氏作成の一

覽表を参照すると、法華宗門書堂版には他にも『録内御書』など、元々、庄右衛門が持っていた七点の版本が含まれている。

なお、本書が近世において活用された形跡として、近世版本における引用例を二点、挙げておく。日榮撰・享保十七年（一七三三）刊『修験故事便覧』巻第四は、「山門秘決二曰」として、止観院地引の際に比良明神が翁として現じた話を引いている。

また、韶澄（荷香庵主人摩訶三毒）撰・天保四年（一八三三）九月序刊『比叡山延暦寺小案内記比叡山坂本山王社小案内記』各一卷合一冊（外題「御山のしをり」）の末尾にも、「山門日吉神社佛閣攻考書冊」として関連書籍を挙げる中、「同建立秘決同秘傳見聞」として書名がみえ、本書の受谷が確認できる。

三、『山門秘傳』の伝本

次に、『山門秘傳』の伝本二本の書誌を紹介する。

○神奈川県立金沢文庫管理称名寺聖教 三七五函六三
鎌倉後期写。綴葉装、一帖。全二十二丁。

原表紙（本文共紙）は殆ど欠損しており、修補による台紙（一

六・六×一三・一糎）に、残存した右端部分が貼られているのみで、外題は確認できない。一丁目も綴目近くの部分のみが残存（遊紙か）。二丁目以降は欠損が少なく、本紙一五・六×一二・二糎。二丁目初行に、内題「山門（秘）傳」。本文は漢文、附返点・送仮名・（一部）読仮名。全文一筆。每半葉七行（第二丁の表・裏のみ六行）、毎行字数不等。字面、約一四・五×一一・〇糎。末尾に遊紙二丁。

○叡山文庫毘沙門堂蔵本。毘・内・九・九・二
江戸前期写。袋綴装、一冊。全九丁。

江表紙（二・九×一四・四糎）中央に、白墨で外題「山門秘傳」直書。表紙左下に同じ白墨で「葱」と記す。表紙右下に、蔵書票（毘沙門堂蔵、大正十四年十二月寄托、部数一三四、書冊一〇〇七）。剥がれた見返紙の表紙側中央に、「山門秘傳」と墨書（外題と同筆。本文とは別筆か）。内題「山門秘傳」。本文は漢文、附返点・送仮名・（一部）読仮名・合点。送仮名・読仮名の一部は後補。每半葉八行、毎行字数不等。字面約一九糎余×一二・〇糎。末尾に「本云正安二年庚子五月二日^{在判}如序」と本奥書があり、その次行から三行が続くが、そこまでが最終丁

最終行で、後欠となっている。

このうち、称名寺蔵本については、古く神奈川県立金沢文庫の「称名寺の新発見資料」展（一九九四年）で展示されており、同展示図録に高橋秀榮氏による翻刻も掲載されている。しかし、同書では欠損している箇所や、他本を参照した方が本来の本文を復原できるような箇所もある。そこで、称名寺蔵本を底本にして、毘沙門堂蔵本によって対校する形で校訂本文を作成し、毘沙門堂蔵本及び『山門建立秘決』慶安四年八月刊本との校異を示した（後掲）。称名寺本と毘沙門堂本はほぼ対応するが、称名寺本には奥書がなく、毘沙門堂本の末尾の三行もない。三者のうち、称名寺本と毘沙門堂本が一致し慶安刊本が異なる字もあれば、毘沙門堂本と慶安刊本が一致し称名寺本が異なる字もあり、中には毘沙門堂本・慶安刊本により称名寺本の字を校訂し得る箇所もある。

毘沙門堂本の正安二年の本奥書から、本書は正安二年（一三〇〇）か、それ以前に成立していたことがうかがえる。ところで、永仁六年（一二九八）九月には、山内の騒乱により大講堂・四王院・法華堂・常行堂・文殊楼・戒壇院が焼けており（天

台座主記』卷五他）、その後の再建事業には三十年余を要しているが、本書にはそうした回禄に関する記事がうかがえない。再建を志すにあたり、回禄前の堂舎の由緒をまとめた可能性も考えられなくはないが、永仁六年九月以前にまとめられたと考えた方が自然であろうか。

なお、この本奥書では「在判」に続いて「如序」としている。現状では判を伴うような序文は残っていないが、あるいは元々は序文が附されていたのかもしれない。

四、『山門秘傳』と『山門建立秘決』の関係

ここで、『山門建立秘決』版本を『山門秘傳』と比較すると、『山門建立秘決』十三丁分のうち、第八丁表裏二行目までが称名寺本『山門秘傳』に対応し、その第八丁裏三行目の末尾に「已上」と刷られている点に気付く。そして、この末尾の文章は

「以今日信心^ニ、宜為成佛種^ト。抑願^ハ、受持誦誦^ニ室内^ニ、
預^ニ釋尊摩頂^ニ、觀念聽學^ノ窓^ニ前^ニ、蒙^テ山王守護^ス、
自他界共期佛惠耳^ト。」^{己上}

という、いかにも本の末尾にふさわしい文言となっている（「自

他界」は『山門秘傳』写本のように本来「自他法界」とあるべき。なお、版本の引用に際して、句読点は私に付加した。以下同)。これは以降の記事が『山門秘傳』に加わる形で増補され、それも含めて版本化されたことを示唆している。そして、毘沙門堂本『山門秘傳』の末尾の三行は、

「問。一山三塔、即一心三觀、三身一身之義也。若爾、以三塔／本尊、可為三身」。何但約東西兩塔、不取楞嚴院本尊。／答。雖三塔^{ナリト}、以兩塔為本也。東西兩塔、本尊者、俱是」(以下、後欠)

となつてゐるが、これは『山門建立秘決』第八丁裏三〜五行目に対応している(後掲の校異参照)。つまり、毘沙門堂本『山門秘傳』は、称名寺本のような形(仮に原『山門秘傳』と称する)が増補されて『山門建立秘決』の形に至る過程を示すものであろう。

『山門建立秘決』のこれ以降の条文は、問答形式と事書形式が交じる形であり、各条の最初のみ簡略に示すならば、以下のようになる(丁数の後のアラビア数字は行数。「…」は中略・後略を示す)。

①第八丁裏3 「問、一山三塔、即一心三觀、三身即一ノ之義也。… 答…」

②第九丁表1 「問、以今三如来、云壽量ノ三佛ノ心、如何。答…」

③第九丁表3 「問、四菩薩ノ体、如何。答…」^{惠心讚云…}

④第九丁表10 「問、傳教大師御廟、在^ル東西ノ中路ノ事、有所表ノ耶。答…^上」

⑤第九丁裏3 「梨下五箇相傳事 一、…。二、…。三、…。四、…。五、…」

⑥第十丁表9 「相傳云、於此宗、圓頓戒ニ云事、有之…」

⑦第十一丁表5 「靈鷲山事。示云、靈者理也、止也。鷲者光也、智也、觀也。…」

⑧第十一丁表9 「尋云、以鷲配惠事、如何。義云、…」

⑨第十一丁裏7 「師云、傳教大師御臨終時、向慈覺大師云、…」

⑩第十二丁表10 「天台山事 示云、…」

⑪第十三丁表6 「師云、天台山者、一念三千、々々一念ノ心也。…」

⑫第十三丁裏1 「師云、此法門ハ甚深秘藏ノ法門也。…是紅葉箱秘藏義也。」

毘沙門堂本『山門秘傳』の後欠部分が、これら全てに対応する本文を有していたかは不明だが、④の末尾に再び「已上」と刷られていることに注目すれば、増補は二段階であった可能性も考えられよう。というのは、①から④まではいずれも問答形式で、原『山門秘傳』に相当する『山門建立秘決』第八丁裏二行目までの記事を補足的に説明している一方、⑤の「梨下五箇相傳事」や⑥の圓頓戒に関する記事などは、原『山門秘傳』とは直接の関わりを持たない内容となっているからである。

①は一山三塔を一心三觀・三諦一諦・三身即一などの表示と解釈する記事（後掲称名寺本では十二丁表に相当）に関する問答、②③は山王上七社を「三如来四菩薩」とする記事（称名寺本では十六丁裏）に関する問答、④は伝教大師最澄の御廟が東西両塔の中路にあつて浄土寺と号するという記事（称名寺本では十丁表）に関連する問答となっている。⑦から⑩までは靈鷲山や天台山に関する記事が中心で、比叡山を靈鷲山に見立て「天台」の字義を説く記事は原『山門秘傳』にもあるので、その関連で増補されたものであろう。ただし、①から④のような問答形式でなく「尋云」「師云」として始まる形式になって

いる点で、①から④までとは異なっている。

なお、⑥の中には「經海僧正モ此法門ヲハ不習義也云」という記事がみえる。經海（一二〇七―七六）は俊範のもとで学び、比叡山横川妙觀院や毘沙門堂に住した天台僧で、『拾珠抄』によれば、僧正に任ぜられたのは文永年間のことである（文永三年に任権僧正。高橋秀榮氏は任僧正を文永五年頃と推測する）。これらの記事は、經海を一時代前の碩学として想起できるような時代・環境において増補されたものであろう。

五、『山門建立秘決』と『山門秘傳見聞』の関係

続いて『山門秘傳見聞』の内容について検討すると、『山門建立秘決』の本文に対応する条文が多く、『山門建立秘決』の内容をさらに詳しく解説するような形となっている。

ここで比較のため、『山門建立秘決』の第八丁表裏二行目までに対応する原『山門秘傳』の内容を少し詳しく述べておくと、その前半では、比叡山諸堂の縁起や本尊をまとめ、後半では寺域の三塔や十五谷、比叡山に至る東西の坂、坂本に祀られる山王権現などを、天台教学から意義付けている（山王権現につい

ては、大宮・二宮・聖真子を山上の釈迦・葉師・阿弥陀の垂迹とする。

このうち前半では、東塔・西塔・横川の三塔それぞれに法華堂・常行堂・中堂があることを述べた後、東塔の九院について、大講堂・四王院・延命院・法華堂・常行堂・根本中堂（止観院）・文殊楼・戒壇院・惣持院の順で本尊や由緒を述べる。次に、同じく東塔の無動寺・前唐院・政所、また西塔の宝幢院・釈迦堂・法華堂、そして横川の中堂・法華堂・常行堂・如法塔・慈恵大師御廟について順に述べ、続けて伝教大師御廟（浄土寺）と、慈覚大師の前唐院での入滅後の奇瑞に言及する。

通常、比叡山の九院といえば、最澄が弘仁九年（八一八）に構想した九院、すなわち止観院・定心院・総持院・四王院・戒壇院・八部院・山王院・西塔院・浄土院を指し、『叡岳要記』や『九院仏閣抄』といった寺誌においても、この順で九院が挙げられている。しかし、本書の前半では、比叡山三塔のうちの東塔（本院）に限って「本院有九院」として、大講堂から惣持院（総持院）に至る東塔の九院を挙げ、これらの堂塔に関する記事に重点を置く点に特色がある。

以上を確認した上で『山門秘傳見聞』を読むと、『山門秘傳

見聞』が『山門秘傳』の叙述内容やその記事配列に対応した構成になっていることは明らかである。以下、『山門秘傳見聞』の各段落のおおよその主題を示すため、改行箇所注目し、改行後の最初の文を抜き出してみる（末尾が「〜事」で終わる引用は、原本においてその標題を示した後、再び改行されていることを意味する）。

- 第一丁表2 「傳云、比叡山_ト者、真俗不二、色心一_ニ躰也……」
- 第一丁裏2 「鎮護國家_ノ靈場_ト者、又_ハ云_ニ天子本命_ノ道場_ト……」
- 第三丁表1 「三塔九院事」
- 第三丁裏1 「法華常行堂建立_ノ事」
- 第四丁表10 「大講堂_ト者、一乘弘通_ノ壇……」
- 第四丁裏2 「仰云、以三塔_ニ當_ニ三諦_ニ時_ハ、東塔_ハ是止観院……」
- 第四丁裏7 「傳云、天_ノ七星_ト者……」
- 第四丁裏8 「大講堂本尊大日事」
- 第五丁表9 「以四天_ヲ、四教_ノ果上_ニ尊_ニ配當_{セル}……」
- 第五丁裏8 「延命院_ノ本尊_ハ、普賢延命_ノ像也……」
- 第六丁裏8 「止観院本尊定_ル葉師_ト事」
- 第八丁表6 「文殊樓中堂_ノ東_ニ建立_ノ事」

第八丁裏5「次戒壇院建立事」

第九丁表8「次惣持院^ハ鎮護國家^ノ道場……」

第十一丁裏2「楞嚴院^ノ本尊觀音^{ナル}事」

第十三丁表4「塔^ノ扉^ノ虫食^ニ云……」

第十三丁表10「浄土寺^ト者、在^リ東西兩塔^ノ中路^ニ……」

第十四丁表8「次、東西^ノ中間^ニ被^トサ御入定處^ヲ故^ニ、有甚深^ノ義……」

第十四丁裏4「次、前唐院御入定所、已前^ニ事畢^ヌ……」

第十五丁裏1「東西^ノ坂^ノ上下事」

第十九丁表4「神教^ト者、是又山王^ノ秘曲也」

第二十一丁表4「傳云、祭禮^ノ時、七社^ノ御輿^ヲ唐崎御幸作^シ申^テ

……」

第二十一丁裏8「問、何故^ツ大津神人、於^テ唐崎、遂^ル彼祭禮^一

耶……」

第二十二丁表7「次^ニ、以^三身^ヲ配當^ル色心^ニ、是一箇^ノ配立也

……」

第二十二裏8「釋尊摩頂^{シテ}云^ル事^ハ、是^ハ有^リ故……」

第二十四表3「仰云、梶井御所^ト者、東坂本也……」

第二十四表5「仰云、大津者、地鉢^ハ大途也……」

第二十四表7「傳云、十禪師宮本地、々藏尊也……」

各段落の始めに堂塔の名称や主題が示されることが多いので、以上によつて簡略ながら各段落の主題もうかがえるが、例えば最初の二段落は、『山門秘傳』の最初の一文「夫比叡山者、顯密弘通之勝地、鎮護國家之靈場也」について、「比叡山」「鎮護國家之靈場」という詞を抜き出し、解説を加えた内容である。

堂名が明示されていない例について、若干補足するならば、第十三丁表の「塔^ノ扉^ノ虫食^ニ云……」は、慈覚大師円仁が横川に立てた如法塔の「扉虫食」の文を示す『山門秘傳』の記事を受けたものである（虫食の文は『叡岳要記』下にもみえるが、『山門秘傳』とは若干異同がある）。また、第十九丁表の「神教」は『山門秘傳』称名寺本と『山門建立秘決』は「秘教」とするが、毘沙門堂本が「神教」とする記事を受けたものである（称名寺本では第十六丁裏に相当）。第二十二丁で山王七社の祭祀が話題になっているのは、『山門秘傳』の「御祭之時^ハ者、七社^ノ神輿御出、自社頭、至唐崎松下^ニ」という記事を受けたものである。このように、『山門秘傳見聞』は、『山門秘傳』を参照・引用しつつ、その叙述順序にならつて、『山門秘傳』の内

容を説き広げ、補足したものとみられる。『山門秘傳見聞』という書名からしても、『山門秘傳』に関する「見聞」であることを示している。

ただし、『山門秘傳見聞』は、原『山門秘傳』に基づいて作られたのではなく、『山門建立秘決』のような形に増補された本文に基づいて叙述された可能性が高い。前掲の『山門秘傳見聞』第二十二裏に「釋尊摩頂^{シテ}云^ル事^ハ」とあるのは、前節で引用した原『山門秘傳』の末尾に相当する一文「抑願^ハ、受持誦^ヲ室内^ニ、預^テ釋尊摩頂^ニ」に対応している。一方、その後の記事で、第二十四表では梶井御所について述べているが、原『山門秘傳』では直接には梶井御所に言及していない。増補記事のうち、前節で⑤として示した「梨下五箇相傳事」を受けているのではないか。また、第二十四表の七行目から本書末尾までは、十禪師とその本地である地藏の利益について述べるが、原『山門秘傳』では、山王の四菩薩として十禪師を挙げる以外に、十禪師に関する記事はない。一方、増補記事のうち、前節で③として示した四菩薩の体に関する問答では、十禪師の本地が地藏であり、六道の衆生を化度する利生について述べており、これを受けた記事と考えた方が自然である。

前節では、経海（二二〇七〜七六）を一時代前の碩学として想起できるような時代・環境において原『山門秘傳』が増補されたと推測したが、『山門秘傳見聞』は当然、それ以降に成立したことになる。『山門秘傳見聞』の中には、浄土寺安置の本尊（伝教大師の御持仏の生身弥陀）について、「弘安^ノ昔^ハ、每晚、放^テ三尊^ノ神光^ヲ、二本杉^ニ被^ル示^サ影向^ニ」（第十五丁裏）という記事がある。新たな関連資料が見出されない限り、成立時期は特定し難いが、「弘安^ノ昔^ハ」の靈驗を語ることができるような時期を考えると、室町時代以前の可能性が高いのではないだろうか。

六、おわりに

本稿では、慶安四年八月刊『山門建立秘決』の記事が、称名寺本のような形態の『山門秘傳』を増補して成立したこと、その原『山門秘傳』は正安二年（二三〇〇）までには成立しており、『山門建立秘決』の前半部が原『山門秘傳』にほぼ対応すること、増補の過程が毘沙門堂本『山門秘傳』の末尾にうかがえること、などを指摘した。また、あわせて『山門秘傳見聞』

は『山門秘傳』を説き広げ、補足した内容となっているが、『山門建立秘決』のような増補後の本文を元にした「見聞」と推測されることについても言及した。

比叡山諸堂の寺誌として鎌倉期に遡る古いものは、まず文永十二年（一二七五）以前に成立した承澄撰『三院記』及びこれとほぼ同内容の『阿婆縛抄』第二百一・諸寺略記下がある¹⁰。また、同じく鎌倉中期頃の成立と推測される『叡岳要記』、元亨四年（一三二四）の杲鎮の口述を永徳三年（一三八三）に重記した『九院仏閣抄』、応永二十四年（一四一七）の奥書を持つ『山門堂舎』（山門堂舎記）などが、信長による焼討以前の重要な記録として知られる。他に鎌倉期の関連書としては、寺域を曼荼羅世界として意義付ける『當山巡礼靈所法施記』等の円仁仮託の巡礼記や『運心巡礼秘記』二巻がある¹¹。ただし、これらは諸堂の本尊や歴史的経緯について詳しいものではない。

こうした中で『山門秘傳』は、正安二年（一三〇〇）以前に成立した寺誌として注目され、『山門秘傳見聞』のような本が派生した点や、『山門建立秘決』として版本化されて近世に影響力を保った点でも、一定の意義を持つものである。比叡山三塔にわたる体系的で詳細な寺誌である『叡岳要記』『九院仏閣抄』

『山門堂舎』に比べると、取り上げている堂塔の範囲や情報量は、東塔を中心とした限定的な内容となっているが、堂塔の由緒等に関する説話的な記事も幾つか含まれている。

ここで説話的な記事の一例を挙げるならば、本書には、円仁が唐から帰朝する際に波の上に出現した金色の弥陀像が、後に常行堂本尊の弥陀像の中に納められたという伝承がみえる。山本ひろ子氏は毘沙門堂本を用いてこの記事に言及し、『山門堂舎記』や延慶本『平家物語』の類似記事との関係を述べた上で、円仁の帰朝の船中に摩多羅神が影向したという『淡風拾葉集』巻三十九の説を、この伝承の異伝として論じている¹²。本書のこの一節では、円仁が帰朝の船上で法道（正しくは法照）和尚相伝の引声念仏を行った際、「成就如是」の「終音」を失念したが、波音がこれを唱えるのを聞き、見ると波上に金色弥陀像が現われたことが記されている。

ところで『古事談』三一―三話には、円仁が音声不足のため尺八で引声の阿弥陀経を吹き伝えたが、「成就如是、功德庄严」という所を吹くことができなかつた際、常行堂の空中から「ヤノ音ヲ加ヨ」というお告げがあり、「如是ヤ」と加えていうようになったという説話がみえる¹³。海中か常行堂か、場は異にし

つとも、『山門秘傳』の話は『古事談』三―一三話の異伝とみて良いだろう（終音）は「ヤノ音」に相当するか。『帝王編年記』や『真如堂縁起』にみえる、『古事談』三―一三話の類話は、場面が帰朝の船上となっている点では『山門秘傳』と同じだが、例えば『帝王編年記』では阿弥陀三尊が出現して「成就如是也節」を伝えたとするなど異なる点がある。『帝王編年記』や『真如堂縁起』に先立って、比叡山にこうした形の説話があったことは、説話展開の様相としても興味深い。

このように、『山門秘傳』には鎌倉後期に遡る寺誌としての価値がある点は勿論だが、加えて、説話研究上においても注目すべき記事が幾つか含まれている。また、比叡山の寺域やその周辺、日吉社を天台教学から解釈する記事も豊富である。以下に示した校訂本文を御活用いただければ幸いです。

* 「附記」書誌調査に際し御高配を賜った諸機関、及びお世話になった方々に、感謝申し上げます。なお、本稿はJSPS科研

費JP16K02394の助成を受けたものである。

注

- 1 『平家物語證注』における巻第二・西光沙汰の明雲座主辭任記事の「印鑑」返却に関する注や、『神皇正統記注解』における嵯峨天皇条の「八ノ舌アル鑑」の注に、「山門建立秘訣」として引くのは本書であろう。『御橋惠言著作集』（続群書類従完成会）参照。
- 2 勝野隆信「慈覚大師入定説考」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年。後に、日本仏教宗史論集第三巻『伝教大師と天台宗』吉川弘文館、一九八五年、に再録）。
- 3 入間田宣夫「中世の松島寺」（『宮城の研究』第3巻 中世篇 II 近世篇 I）清文堂出版、一九八三年）。
- 4 佐々木馨『中世国家の宗教構造』（吉川弘文館、一九八八年）。
- 5 大谷大学図書館古典籍データベースによれば、『山門秘傳見聞』と合綴合一冊で、外題「山門建立秘訣」（書題簽）、題簽横に「山門秘傳見聞 合」とあり、縦二五・九糧、界高一・九糧。
- 6 『江戸時代初期出版年表』（勉誠出版、二〇一一年）。
- 7 冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（平楽寺書店、一九八三年）。
- 8 書名と冊数、整理番号、外題、内題は、叡山文庫調査会編

『叡山文庫毘沙門堂藏識語集成』（二〇一六年）に掲載されている。

9 高橋秀榮「妙観院の碩学経海の行状」（『駒澤大学仏教学部論集』三九、二〇〇八年十月）。

10 以下、山門記録については、景山春樹『比叡山寺—その構成と諸問題』（同朋舎、一九七八年）、『比叡山』「六、比叡山の諸堂と霊跡」（法蔵館、一九八七年）、武覚超『比叡山三塔諸堂沿革史』（叡山学院、一九九三年）等参照。

11 これらの巡礼記の伝本とその性格については、拙稿「比叡山の巡礼記と記家—根本中堂前の竹台をめぐる」（『巡礼記研究』第二集、二〇〇五年九月）で言及したことがある。
12 （『異神』「摩多羅神の姿態変換—修行・芸能・秘儀—」平凡社、一九九八年、一一九頁）。

13 新日本古典文学大系『古事談 続古事談』（岩波書店、二〇〇五年）。「古事談」の本話については、深澤希望氏の御教示を得た。

○『山門秘伝』校訂本文と校異

*凡例

・底本には、神奈川県立金沢文庫管理・称名寺聖教『山門秘傳』を用い、校訂本文を上段に、底本の本文注と対校本との異同、及び校訂注を下段に示した。底本については、『称名寺の新発見資料』（神奈川県立金沢文庫、一九九四年）所載の翻刻も参照したが、改めた字も多い。

・対校本には、叡山文庫毘沙門堂本『山門秘傳』、及び『山門建立秘決』慶安四年八月刊本を用い、前者を㊸、後者を㊹の略号で示した。『山門建立秘決』慶安四年八月刊本については、西尾市岩瀬文庫蔵本を主に参照した。ただし、書入れを除いた印面を底本と対校する必要上、印字と墨の書入れ（主に訓点や送仮名）を区別する際に、本稿に挙げた他伝本も参照した。

・訓点や振仮名、送仮名の相違は、原則として校異に含めていない。ただし、本文漢字の異同を示す際、対校本に付されている訓点等も共に示した場合がある。また、正字と略字体の相違や、「釈（釋）」と「尺」、「法華」の「華」と「花」、「萬」と「万」の異同については、省略した。

・本文の異同及び改補に関する校異で、その同一行に属するも

のは○記号を挿んで連記した。

・称名寺聖教『山門秘傳』において欠損している箇所や、底本と異なる叡山文庫毘沙門堂本など対校本の字句の方が本来の形かと推測した箇所については、対校本によって本文を補ったり改めたりし、その旨を注記した。

・校訂本文には、私に句読点と並列点、人名比定（右傍括弧内）を補った。異体字は通行の字体に改め、合字は開いた。底本の形に対し、訓点（返点）は追加していない。

・行取り、小書は、底本の通りとしたが、対校本により本文を補ったために行が増えた二箇所は、その旨がわかるよう下段に注記した。また、底本に存する抹消箇所は校訂本文には示さず、挿入記号を用いて文字を補った部分は、本文に入れ込んだ。

・底本に従い、各丁の表裏の区切り目を「(二オ)」のように示した。

▽『山門秘傳』校訂本文

山門秘傳

夫比叡山者、顯密弘通之勝地、鎮

護国家之靈場也。佛法王法如車

二輪一故、以此山ヲス比叡山ト、一山ニ有

三塔。所謂、東塔ヲ号本院ト、西塔ヲハ号宝

幢院ト、横川ヲハ号楞嚴院ト。三塔ニ各有「(二一オ)

三ノ靈場」。名法花堂、常行堂、中

堂。合テ三塔九院也。

又、本院有九院。一、大講堂。深草天

王御願也。本尊ハ大日如来。於此堂ニ

被修二季豎義一。夏豎義七ノ日、

以六月四日為終。傳教大師御忌日也。〔(二二ウ)

号六月會。有勅使、々々者時弁官也。

冬ノ豎義ハ十ノ日、以十一月

廿四日為終一。天台大師御忌日也。号

霜月會ト。

二者、四王院。文徳天王御願也。本

▽本文注・異同・校訂注

【秘】底本欠損、(四)ニヨリ補フ。

【之】底本「也」ヲ見消ニシ、右ニ「之」傍記。

【此山】底本「山」字欠損、(四)ニヨリ補フ。

【各】(四)ナシ。

【常行堂、中堂】(四)「中堂常行堂」。

【王】(四)「皇」。○【日】底本欠損、(四)ニヨリ補フ。

【个】(四)「箇」。

【以六月四】底本欠損、(四)ニヨリ補フ。

【有勅使ノ弁官也】底本ハ前行「傳教ノ日」ノ右傍行間ニ記ス。(四)ノ位置ニ従フ。

【个】(四)「箇」。

尊、金銅立像四天也。在講堂西^二。

三者、延命院。朱雀院御願也。

本尊、普賢延命像也。

在大講堂ノ東^二。四者、法花堂。

在講堂北^二。傳教大師、菫當山

無人時、始結草庵、修行法花^一。

于時有聲、誦安樂行品。大師

尋聲^一、行向^五其処^一、有^リ古髑髏。

々々云、我是汝前生ノ古骨也^{云々}。因

茲、大師其處立法花堂^一、行常坐三昧^一。

其後、結十二人禪衆、相續。大師

坐禪床、于今不斷絶。大師御發

願云、我盡未來際、在十二人中^二

共行法花^{云々}。本尊、天台大

師御自筆法花經也。

五者、常行堂。慈覺大師歸朝

之刻、於船中^二誦法道和尚相

傳引聲之時、成就如是終音、

有御失念^一。于時波音唱之、聞

「(三才)

「(三ウ)

「(四才)

【銅】^①「剛」。○【講堂】^②「大講堂」^③「大佛堂」。

【本尊、普賢延命像也】底本ナシ、^④^⑤ニヨリ補フ。タダシ、【也】^⑥ナシ。

【無】^⑦「无」。○【結】^⑧「立」。

【于】^⑨ナシ。○【大師】底本「大師法花」。

【^五】^⑩ナシ。^⑪「ニ」。○【古】^⑫ナシ。

【我是】^⑬ナシ。【前】^⑭「先」。

【行常坐】底本「行坐」、右ニ「常」傍記。^⑮「行法華」。

【床】^⑯「處」。○【今不斷絶】底本「今断絶」、右ニ「不歟」傍記。

【本尊】^⑰^⑱「本尊者」。

【大師】^⑲ナシ。

【終】底本「纔」、^⑳^㉑ニヨリ改ム。

即有御覺悟。因茲、御覽スルニ、波上有金色弥陀像。低テ頭奉請也。

時、尊像即來ヘリ大師御袖ニ。其

後、立テ常行堂一、本尊阿弥陀像

中ニ納彼金像ヲ、始行常行三

昧ヲ。結十四人禪師、相繼不斷

絶一。大師御願云、我盡未來、在

十四人禪師中ニ、共行之一云々。當堂在

法花堂南ニ。七月ノ庭立、八月ノ大念

佛、正月修正、每月例時、從昔已來

未曾斷絶一。六者、中堂。号止觀院一。

本尊、傳教大師御作、生身葉

師如來也。号生身如來ト事、世以

皆所知一也。半行半座行儀也。顯密二

法之行、長日不退之勤、併祈

天長地久御願、資万民快樂

福祐。昔、

傳教大師、為立此止觀院、令相地

□之時、白髮老人來云、我見此湖

【也】也【之】。

【阿】也【以】。

【金】也【金色】。

【繼】也【續】。

【絶】底本欠損、也ニヨリ補フ。○【願】也【發願】。○【未來】也【未來際】。

【十】底本欠損、也ニヨリ補フ。○【之】也ナシ。○【當】也【常行】。

「(四ウ)」

「(五オ)」

【以皆】也【皆以】。

【半行半座】底本「半。行儀、右ニ「座敷」傍記。也【半行半坐】。

【地久】也【地久之】。

【相】也【相】ノ上ニ「掃」サウト重書。也【引】。

【】底本欠損、也ニハ該当字ナシ。○【湖】底本「潮」、也ニヨリ改ム。

海七度成陸、成海。即比良明神也。〔一五ウ〕

建立堂舎之地形、此処最勝也。佛

法弘通可久云。被所相地者、今止

觀院地也。其後、欲引平地、人力難及。爰、

色雲覆山^一、諸天降地^{タケリ}、護法善

神同心与力^{シテ}、不經時日^一、引平地^一畢^ヌ。

彼地中^ニ有銀八舌^ノ鑿^一。大師御入唐

之時、登天台山^一、可奉開見天台 〔一六オ〕

大師ノ御經藏之由、被望仰。然而

此經藏、天台大師御存生之時、

被立之後、不被開之。又無其鑿。就

中、天台大師御遺言云、我減度

後、沙門来、以可開之。彼沙門^ハ、即我

身^{ナルヘシ}云。仍、輒非可^{キニ}開御經藏。况

無經藏鑿、争可開戸^云。大師言 〔一六ウ〕

我持鑿、以之欲開。然後、以御所

持八舌鑿、開御經藏、悉以御披

覽云。爰知、大師即天台御身也。

件鑿、代々座主相傳^テ于今有

【海】底本欠損、^也ニヨリ補フ。

【相】^也「相」ノ上ニ「掃^{サウ}」ト重書。^也「禮」。

【欲】底本ナシ、^也ニヨリ補フ。○【人力】底本「分」、^也ニヨリ改ム。

【色】^也「五色」^也「紫」。

【時日】^也「日時」。○【畢^ヌ】^也ナシ。

【彼地】^也ナシ。○【鑿】^也「鑿」。

【然而】^也「而」^也「然」。

【經藏】^也「御經藏」。○【存】^也「在」。

【鑿】^也「鑿」。【就】底本「付」、^也ニヨリ改ム。

【減度】^也「減度之」。

【以】^也ナシ。

【身】^也「後身」。

【經藏鑿】^也「鑿」。○【争】底本「常」、^也ニヨリ改ム。○【可】^也ナシ。○【言】^也云。

【鑿】^也「鑿」。○【御】^也ナシ。

【御披覽】^也「御披覽」^也「被披覽」。

【云】^也「畢^ヌ」。○【知】^也「以」。○【御身】^也「御後身」。

【鑿】^也「鑿」。

之。座主御辭退之時者、此印
鎔送^テ御経藏、次座主補任之

時、宣命勅使^{小僧言}、於大講堂

庭開宣命之後、被請取此印

鎔。誠是山門重寶也。

七者、文殊樓。是^ハ非行非坐行儀也。

在中堂東。

八者、戒壇院。傳教大師御相傳、

円頓戒壇也。六十余州僧徒、受^ト

大乘妙戒^ヲ、在此戒壇^ニ。

九者、惣持院。鎮護國家道場、將

門調伏處也。已上、本院内之九院佛

閣也。此外、本院南山、号無動寺。

相應御本尊、生身不動在也。

又、慈覺大師御遺跡、号前唐

院。在中堂北^ニ。天台一箱在之^ニ。又、

當四王院東^ニ、有政所^ニ。本尊、傳

教大師御作大黑天神也。止觀

院内、北礼堂内陣、有傳教

「(七才)

「(七ウ)

「(八才)

【主】^①ナシ。

【鎔】^②「鎔」^{ヤラ}。○【次】^③「以」。

【勅】^④底本「助」、^⑤⑥ニヨリ改ム。

【鎔】^⑥「鎔」。

【非行非坐】^⑦底本「非行。坐」、右ニ「非」傍記。

【大師】^⑧ナシ。

【余州】^⑨「余州之」。

【將門】^⑩「山門」。

【也】^⑪⑫「之」。

【天台】^⑬ナシ。

【北】^⑭「此」。○【陣】^⑮「陳」。

大師御作等身毗沙門、号毗

沙門堂^一。此等堂々者、在本院山

頂^二。即四谷中央也。谷々聖跡、

房々靈佛、依繁畧之。

次、寶幢院。中堂尺迦堂也。本尊

形像、同止觀院本尊故、尺迦像云

事、世以不知之。爰、天人降臨^{シテ}、

散花而礼云、

敬礼天人大覺尊、

恆沙福智皆圓滿、

因緣果滿成正覺、

住壽凝然無去來^云。

仍、自彼天人降臨ノ昔^一已來、以之

号尺迦堂。又、法花堂、常行堂、有

之。本院行儀、其外堂々不能委

細^一。次、楞嚴院、九条右相府建立也。

中堂本尊、十一面觀音也。又、有

法花・常行両堂^一。

慈覺大師、於相洞^二、修如法書寫

【大師】^①ナシ。○【等】^②「生」。○【号毗沙門】^③ナシ。

【畧之】^④「畧之、已上」。

【堂】^⑤ナシ。

【世】^⑥ナシ。

【而礼云】^⑦ナシ。

【天人】底本「天」ノ下ニ墨滅跡アリ。

【緣】^⑧「円」^⑨「圓」。

【仍、自彼】^⑩ナシ。

【本院行儀】^⑪「如本院行儀」。

【右相府】^⑫「右承相」。○【建立】^⑬「御建立」。

「(九ウ)

【於】^⑭「出於」。

行始処也。以彼根本相一本^一、立塔^一。々、

扉虫食云、有人得見此塔、礼拝供

養、當知是等皆近阿耨菩提^{云々}。

此塔、即中堂右前也。又、當院有

慈惠^(貞徳)大師御廟。自余靈場、不能

具載^矣。

又、傳教大師御廟、東西兩塔中路^ニ

有。号淨土寺^ト。慈覺大師者、於前

唐院御入滅^云。爰、自御館飛出、

行東方、御草鞋落花方峯。其

日其時、至出羽國^{云々}。仍、御忌日正

月十四日^{ニハ}、於御遺跡前唐院、被修

八講。自余大師御事、不能委細。

別傳尋可見之。

〔十ウ〕

抑、依正真俗、皆相應法也。故歷諸

事^ニ悉有所表^一。所謂、一山三塔^ハ、表

一心三觀、三諦一諦、三身即一、一心即

三^ヲ。三千學窓^ハ、顯一念三千、々々一

佛^ヲ。東西兩塔、各四谷、横川七谷^{シテ}、

【始】^(版)「給」。○【楯】^(毘)「杉」。

【有人】^(毘)「若有人」。

【當】^(毘)「ナシ」。○【等】^(毘)「人」、タダシ右ニ「等イ」傍記。○【云々】^(毘)「文」^(版)「ナシ」。

【中】^(版)「ナシ」。○【又】^(版)「ナシ」。

【惠】^(毘)「覺」。

【東西兩塔中路^ニ有】^(毘)「在東西兩塔中路^ニ」。

【滅】^(毘)「滅」ノ左ニ抹消符ヲ付シ、右ニ「定」傍記。○【云】^(毘)「云」^(版)「ナシ」。

【花方】^(版)「華芳」。

【云々】^(毘)「ナシ」。

【別傳尋】^(毘)「尋別傳」。

【歷】^(毘)「曆」^(版)「曆」。

【塔】^(版)「谷」、^(毘)「ニヨリ改ム」。

【三諦】^(版)「底本ナシ」、^(毘)「ニヨリ補フ」。○【一心】^(毘)「々心」。

【三】^(毘)「三身」。○【三千】^(版)「々千」。○【窓】^(毘)「素」。○【々々】^(版)「三千」。

十五谷也。是十五智斷表。三塔各、有法花・常行・中堂。三々九諦」(十二才) 円融三觀也。三堂如次空假中也。

以行儀、可知之。九院佛閣、又是九品淨土、九界佛性也。号中堂事、谷々、中故也。又是中道也。東塔中堂、葉

師如來。西塔中堂、尺迦善逝、十六王子、初後如來也。尺迦在西、顯即弥陀故、

兩院中堂本尊、葉師・尺迦・弥陀」(十二ウ) 也。即是兩所三聖、本地本門壽量

三佛也。山、是、常在靈山之諸法實相ノ峯也。若付テ密教、示此義、

一山三塔、三密同躰、三部不二之山也。一山九院、金剛九會、胎藏九

尊。東西兩塔四谷、兩部五智靈峯、東西因果曼荼羅也。楞嚴」(十二才)

七谷、顯金胎不二、瑜祇深秘。本有秘密無盡莊嚴身土、豈非此山耶。

凡、一山十五谷、十六薩埵、本有修

【十五谷也】(釋)「合十五谷」(釋)「合十五谷也」。○【是十五智斷表】(釋)「是表十五智斷」。

【中也】(釋)「中」。

【行】底本、擦消跡の上に重書。

【々々】(釋)ナシ。

【故也】(釋)「故」。○【又是中道也】(釋)ナシ。

【中堂】底本ナシ。(釋)ニヨリ補フ。

【也】(釋)ナシ。

【中堂】(釋)「中々々堂」。

【靈山之】(釋)「靈山之山」(釋)「靈山ノ々」。

【實相ノ】(釋)「實相之」。○【示】底本、擦消跡ノ上ニ「示」重書。(釋)「而論」。

【密】(釋)「山」。

【藏】(釋)ナシ。

【尊】(釋)「尊也」。○【四谷】底本「四塔」、(釋)ニヨリ改ム。(釋)「兩谷」。

【荼】(釋)「隨」。

【顯】底本ナシ。(釋)ニヨリ補フ。○【祇】(釋)「伽」。

【豈】(釋)「是」。○【耶】(釋)「哉」。

【凡】(釋)「九」。

生妙鉢、内證般若法曼荼羅也。
委細可思之。

又、當山^ニ有東西坂。自山上至西坂下^一、
五十丁。自西坂下至京中、五十丁也。」(十二ウ)

華夷諸人、登山之時、從京都至^レ、

山下^一、翻五道流轉^レ忘^ル心^一、向發菩提心

山^ニ也。洛中^ニ有河、顯生死愛河^一。坂下

有河^一、示菩提彼岸^ヲ。今此山下、有不動

堂。勸發菩提心^一、為斷四魔障^一也。

見我身者、發菩提心、聞我名者、斷

惑修善、誠有憑。渡此河者、洗除^レ」(十三オ)

無始之罪垢、趣此山者、顯得本

有佛性^一。設雖無顯益、誰不預

冥益耶。自坂本至佛閣中路、五

十丁也。過於五百^一、至於寶所^ニ、坂

中^ニ有息所^一。号水飲^一。有雜人息所、

有貴首御所^一、三百由旬化城、以

之可知^一。山路中途、凡三里也。出三^レ」(十三ウ)

界、斷三或^一、盡^ス三忘^一、超^テ三祇^一、登

【生】^{〔版〕}「行」。○【内】^{〔里〕}「円」。○【荼】^{〔里〕}ナシ。

【自】^{〔版〕}ナシ。○【上】^{〔里〕}ナシ。

【(行頭ノ)丁】^{〔版〕}「丁也」。

【華夷】底本一字目欠損、^{〔版〕}ニヨリ補フ。^{〔里〕}「幸哉」。

【忘^ル心^一】^{〔里〕}「妄^{ミヤウ}」。○【菩提心】^{〔里〕}「菩提心之」。

【洛】^{〔版〕}「路」。

【發】^{〔版〕}ナシ。

【誠】^{〔里〕}「誠以」。○【除】^{〔版〕}「浴^シ」。

【無】^{〔里〕}「无」。

【無】^{〔里〕}「无」。

【耶】^{〔里〕}「ナシ」。○【本】^{〔版〕}「下」。

【於】^{〔版〕}ナシ。

【有雜人】^{〔里〕}「雜人有」。

【御所】^{〔里〕}「御息所」。

【之】底本欠損、^{〔里〕}ニヨリ補フ。○【路】^{〔里〕}「洛」。○【凡】底本「分^テ」、^{〔里〕}ニヨリ改ム。

【界】底本欠損、^{〔里〕}ニヨリ補フ。○【三或】「三」底本欠損、^{〔里〕}ニヨリ補フ。○【忘】^{〔里〕}「妄」。

菩提心山^ニ、顯^{スコト}本有覺^ト、亦以可知^一。

無盡莊嚴無窮万德、以言「難盡」、

以心「難測」。東坂下^{ニハ}、七社權現王

子眷屬、社壇嚴重^{ニシテ}、靈驗殊勝也。

自山頂「至坂下」、廿五丁也。離五々

生死^一、得^キ五々三昧^ヲ、修行道路也。」「(十四才)

東坂下有社壇^一、号早尾權現。

本地不動尊也。其利益例^{シテ}西坂

下^ニ、可知之^一。凡、東西坂上下、從因^一

至果^一、從本「垂迹」云也義、可知之^一。又、從

大宮御前出大坂^一之時、其路有三

丁石橋。預和光同慶利益^一、歸本地

寂光大道^一中路也。故三丁石橋^ハ、円^ニ「(十四才)

伏三惑、頓^ニ超^ニ忘^ニ表示也。

問。依此等義^一、以當山「靈山說法花

處」可云耶。

答。經云^{神力品}、當知是處即是道

場、諸佛於此轉於法輪等^云。

法花流布處、何山何里^カ、非成道

【山】^版「上」。

【殊勝也】^版「殊勝^{ナリ}」。

【有】^版「在」。

【尊】^版ナシ。

【上】^版ナシ。

【云也義】^思ナシ、^版「義」。○【知】^思版「思」。

【大宮】^思「本宮」。

【丁】^版「町」。○【預】^思ナシ。

【寂】^大底本欠損、^思版ニヨリ補フ。○【丁】^版「町」。

【伏】^{底本}欠損、^思版ニヨリ補フ。○【忘】^思版「妄」。

【靈山】^思版「即靈山」。

【神力品】^版ナシ。

【等】^思ナシ。

【何山】^版ナシ。

說法砌「耶。何況記一、尺テ王城著山」(十五オ)
云、既云、山即法性ト、正因法身ナリ。余之

二德准諸文一説。

又、約山為觀一者、山城雖異一、同是依
報是故約之、以觀正報_文。法性寂

光一山、依正不二、三身四土円融相

即ノ処ト聞_{タリ}。決一尺天台山一云、天

台者巖也。元氣未分、混而為一、兩」(十五ウ)

儀既判、清而為天、濁而為地。此即

俗名且依俗_{ニセハ}、台者星名也。其

地分野應天三台故、以名焉_{云々}。只

點一法二諦宛然、一心三觀、三身

相即、一身三諦、本常寂光、其

旨分明也。三國雖異山、其義

是同。又、王城山王二名一致也。可思」(十六オ)

之。就中、當山一山三山也。山形即

山字也。字訓義可思之。三國靈

山說法花處、文義共無相違。秘

教所談、亦可同之。准前、可知而已。

【耶】_思【哉】。

【既】_思「決」。

【説】_思ナシ。

【又】_思「又説」。

【】_思ナシ。

【聞_{タリ}】_思「同也」。○【決一】_思「決一云」。

【台】_思巖。底本欠損、_思ニヨリ補フ。_思ハ「巖」ト送仮名ヲ伴フ。

【儀】_思「義」。○【判、清】底本欠損、_思ニヨリ補フ。_思「別清シテ」。

【也】_思ナシ、_思「ナリ」。

【三台】_思「三台星」。○【名】_思「為レ名」。○【】_思ナシ。_思「文」。○【只】_思【唯】。

【點】_思【默】。○【三觀】_思【止觀】。

【雖異山】_思【山雖異】。○【義】_思【儀】。

【思】_思「知」。

【三】_思【王】。

【字訓】_思「訓」。○【靈山】_思「靈山靈山」トシ、後ノ「靈山」ヲ丸テ閉ミ抹消。

【無】_思「无」。○【秘】_思「神」。

【亦】_思ナシ。○【已】_思ナシ。

山王權現者、円宗守護ノ神久住ヘリ。

當山ニ尋本地^ヲ、三如来四菩薩也。三

如来者、大宮權現ハ尺迦如来、聖レ〔十六ウ〕

真子權現弥陀如来。此両社、大宮

方一所御坐。地主權現葉師如来、

是別ニ御坐、号ニ二宮方^ト。故ニ此三社

名両所三聖^一。本地東西両塔ノ本

尊、垂迹ハ両所三社和光也。自寂

光ノ山頂出^テ、同居樹下^ニ、守円宗人

法^ヲ、示如来知見。御説宣云、樹下和レ〔十七オ〕

光同塵事、二度其事皆已畢。今

度不詣我寶前^一、何知生死盡不

盡^ヲ文。我等既預和光利益^ニ、何疑^{ハム}

菩薩引導^ヲ。凡、山者、依報三諦一諦也。

王者、正法一諦三諦也。依正不^{ニシテ}寂

光身土也。両塔三尊、両所三聖、三

身一身、々々三身、只點一法三諦、レ〔十七ウ〕

宛然云也。四菩薩者、客人權現ハ、大宮

方ニ御坐。十禪師權現ハ、二宮方御坐。

【者、大】底本欠損、^也ニヨリ補フ。○【權現】^也「權現者」。

【權現】^也ナシ。○【如来】^也ナシ。○【社】^也「神」。

【御】底本欠損、^也ニヨリ補フ。○【如来】^也ナシ。

【是】^也「此」。○【方】^也ナシ。

【名】^也「号」。

【所】^也「處」。

【人】^也「正」。

【其事】^也「其中」。○【皆】^也「既」。

【何】^也ナシ。

【文】^也ナシ。

【導】^也「道」。○【也】^也ナシ。

【法】^也「報」。○【三諦也】^也「三諦」。

【一身】底本欠損、^也ニヨリ補フ。○【只】^也「唯」。

【云】^也ナシ。

【御坐】底本欠損、^也ニヨリ補フ。

八王子、三宮^ハ、二宮方、八丁ノ坂^ヲ登^リ山頂^ニ御坐。御在所、大分^ハ、兩所也。委尋^ハ三所也。兩塔本尊^ハ三佛^{ナリ}。兩所垂跡^ル三聖也。二三ノ義同之。三身^ニ身、三諦^ニ諦、豈異之哉。上七社^ノ外、^レ〔十八才〕中七下七ノ社壇^ハ、皆是王子也。社壇^ハ在山本^ニ。寶殿ノ莊嚴無雙也。御正躰、千万光明互^ニ涉入、重々帝網ノ土、在^テ眼前^ニ不遠^ラ。御祭之時^ハ者、七社ノ神輿御出、自社頭^ニ、至唐崎松下^ニ。是即、出同居說法利生儀式也。御祭日數四个日、以^レ〔十八ウ〕卯月中申^ヲ、為^レ正^一。前三後一表開三頭^一。坂本六^ハ、六條、六百家也。六^ハ、六趣昏衢、六百家^ハ、所具十如十界也。六^ハ、六条内、貫主御所、高僧住房、住侶宿所、男女住宅、相交^マ、凡聖雜居同居行相也。貴賤上下、忌触穢不淨、運清淨信

〔十九才〕

【丁】^〇「町」。

【跡^ル】^〇「迹^ハ」。^〇【二身】^〇「ナシ」。

【二諦】^〇「ナシ」。^〇【豈】^〇「是」。

【中七】^〇「七」。

【是】^〇「永」。

【个】^〇「箇」。「箇」。^〇【以】^〇「ナシ」。

【个】^〇「箇」。「箇」。

【个】^〇「箇」。「箇」。

【房】^〇「坊」。

【同居】^〇「ナシ」。^〇【貴賤上下】^〇「去^ニ貴賤上下」^〇「ナシ」。

心^一、參詣往還、日夜無絶^{コト}。出離生死

因縁、頗同在世利益^一。又、湖海浮

船^一、上下往來^ス。生死大海、菩提^レ彼岸、

在目前^一、可見^ッ。海邊有三濱^一、豈

非衆生到岸儀哉。靜思此事^一、

叡山常在靈山本土、山王本地、無

作三身也。本土^ハ衆生本來所^レ居^ニ。〔(十九ウ)

居、三身^ハ衆生本有色心也。以

今日信心、宜為成佛種^一。仰願

受持誦誦室內、預尺尊摩

頂^一、觀念聽學窓前^ニ、蒙山王守

護、自他法界共^ニ、期佛惠^ニ耳。

〔(二十オ)。底本ハ以下白丁。)

【心】^⑧ナシ。

【豈】^⑧「是」。

【衆生】^⑧「永」。

【叡山】^⑧「比叡山」。○【無】^⑧「无」。

【也】、本土^ハ衆生本來所居^ニ。〔^⑧ナシ。

【三身】^ハ底本「三」欠損、^⑧ニヨリ補フ。〔^⑧ナシ。

【法】^⑧ナシ。○【耳】^⑧「可云」〔^⑧「耳^上」。

* 以上に続く、叡山文庫毘沙門堂本の末尾記事

本云、正安二年庚子五月二日在判如序

問。一山三塔、即一心三觀、三身一身之義也。若爾、以三塔

本尊^一、可為三身^一。何但約東西兩塔^一、不取楞嚴院本尊^一。

答。雖三塔^{ナリト}、以兩塔^一為本也。東西兩塔ノ本尊者、俱是

(以下、後欠)

【本云】^{在判如序}【^版ナシ。

【義】^版「儀」。

【本尊】^版「乎」。

【東西兩塔】^版「東西ノ塔ノ」。○【俱】^版「但」。

